

(案)

情報通信審議会 情報通信技術分科会
陸上無線通信委員会（第 91 回）議事概要

1 日時

令和 7 年 4 月 10 日(木) 10:00～11:15

2 場所

WEB上で開催

3 出席者(敬称略)

主 査：三次 仁

専 門 委 員：飯塚 留美、井家上 哲史、伊藤 数子、今村 浩一郎、太田 香、
加藤 康博、児玉 俊介、杉浦 誠、杉本 千佳、生田目 瑛子、
藤野 義之、森田 耕司、吉田 貴容美

オブザーバー：前原 文明

事 務 局：総務省 移動通信課 第一技術係

4 配布資料

資料番号	資料名	作成者
資料 91-1	陸上無線通信委員会（第 90 回）議事概要（案）	事務局
資料 91-2-1	陸上無線通信委員会報告（案）「6/6.5/7.5GHz 帯固定通信システムの高度化に係る技術的条件」（概要）	事務局
資料 91-2-2	陸上無線通信委員会報告（案）「6/6.5/7.5GHz 帯固定通信システムの高度化に係る技術的条件」	事務局
資料 91-2-3	電波法関係審査基準の一部を改正する訓令（案） 「6GHz 帯及び 6.5/7.5GHz 帯固定局」[新旧対照表]	事務局

5 議事

(1) 前回の議事概要案の確認

資料 91-1 について、特段の意見なく（案）のとおり承認された。

(2) 委員会報告（案）「6/6.5/7.5GHz 帯固定通信システムの高度化に係る技術的条件」について

資料 91-2-1、資料 91-2-2 及び資料 91-2-3 に基づき、事務局より説明が行われ、報告案について、委員からの修正意見を反映した上で意見募集の手続きに進むことが承認された。

主な質疑応答の概要は以下のとおり。

児玉専門委員： 空中線特性の更新（概要資料 P.5）において、ETSI 規格にした場合、アンテナのサイドローブ特性が劣ることから半数くらいで干渉の影響が見られるにも関わらず国内製品の供給状況から導入を可能としたということであるが、国内メーカーでは従来のサイドローブ特性の製品については今後製造する予定がないという意味か。

前原オブザーバー： 今後国内メーカーにおいて、今後の供給は難しいと聞いている。

児玉専門委員： サイドローブ特性を緩いものにして干渉が増加するが、他の見直し（回線設計や受信感度）によってサイドローブによる影響を相殺し、従来と同じ有効利用が図られるということか。

前原オブザーバー： アンテナサイドローブの影響を他の見直しで相殺をし、周波数の有効利用を図っていくという考えである。

今村専門委員： 高次多値変調を導入するとのことだが、回線設計上はどの変調方

	式で確認を行うのか。また、受信感度の導入に際して、標準受信入力で規定したとき C/I の規定はどうか。
三次主査	正式には事務局から回答をしていただくが、与干渉側は、通信電力と伝搬距離で受信感度は計算できるので、変調方式による干渉レベルの変化はないと思われる。
事務局	確認して回答する。
井家上専門委員	ドハティ AMP 方式の採用（概要資料 P. 10）において、電力増幅器で電力効率が上がったという部分は最終的に技術基準の中で反映される形になるのか。
前原オブザーバー	本件は技術的条件というより、開発における検討によるものなので、技術基準に反映されるものではない。
三次主査	変調方式ごとにアンテナ利得が違う（異なる絶対利得の値が規定されている）状態のままなのか統一されたのか。
前原オブザーバー	変調方式によってアンテナ利得が違う（異なる絶対利得の値が規定されている）という部分は既存のまま残っている。
三次主査	概要資料 P. 10 の高出力の有効性において、6. 5GHz 帯における改良無線機最大送信出力が 2048QAM で 29dBm となっているが、どのように計算されて出来てきたものなのか。
事務局	確認して回答する。
飯塚専門委員	本検証では ETSI 規格を参照したということだが、欧州では無線 LAN だけでなく IMT との共用についても検討を始めている。無線 LAN だけではなく今後想定される IMT との共用にも耐えうるような検討を今回されたのか。
前原主任	今回は無線 LAN との共用のみを検討しており、IMT との共用の検討について今回は行っていない。

(3) その他

事務局より、次回会合は 5 月に開催する予定であり、具体的な次回会合の開催日程等については別途連絡する旨の説明が行われた。

(以上)